

(4) ホスピタリティハウス

ホスピタリティハウスは、オリンピック・パラリンピック開催都市において、世界各国、各地域、各企業などが自らをPRするために設置するハウス（展示館やパビリオン）です。リオ大会では、28の国や地域、企業などがホスピタリティハウスを設置しています。ホスピタリティハウスの設置については、それぞれが独自に創意工夫して個性あるハウスにしていることが特徴です。ブリティッシュハウスは、リオ市の古城のような建物一棟を丸ごと2年ほど前より借用して準備を進め、また、ポルトガルにおいては自国から帆船を持ち込み、帆船そのものをポルトガルハウスとして運河に係留し、人々を惹きつけるために趣向を凝らしていました。ハウスの設置場所は、リオ市内にそれぞれが独自に選定し、設置しているもので企業のナイキにおいては、人々が集まるオリンピックブルバード（大通り）に設置し、大勢の人々でにぎわっていました。

ホスピタリティハウスは、世界各国からオリンピック開催都市に集まる多くの観光客をはじめ官民のスポーツ関係者や多種多様な企業等が自らを世界に向けて情報発信・PRする絶好の機会であり、どのホスピタリティハウスもかなりの経費を投入し、力を入れて取り組んでいると感じました。



ブリティッシュハウス



ポルトガルハウス



ジャパンハウス



ナイキハウス

私たちは、今回、ジャパンハウスを中心に視察調査を行うとともに、ブラジルハウス、ブリティッシュハウス、オセアニアハウスも訪問してきました。

① ジャパンハウス

ジャパンハウスは、2020 東京大会の開催に向け、大会組織委員会、東京都などによりオールジャパンで日本および東京をPRする場で、大会期間中、日本の関係者・団体の活動拠点になるものです。そこでは、日本代表選手の記者会見や各種レセプション、関係者向けのホスピタリティーサービスなど多様な催しものが開催されていました。会場は、リオ市のバッハ地区にある「シダージ・ダス・アルテス」というポルトガル語で“芸術の街”を意味する文化・芸術の複合施設に「Tokyo2020JAPANHOUSE」ジャパンハウスとしてリオ大会の開催期間中開設されています。

1階のイベント会場では、連日様々な催しを実施され、日本の伝統芸能である和太鼓が披露された他、リオのサンバやブラジルのアーティスト、東京観光セミナー、トークショー、日本食のシンポジウムなど様々なステージが行われているとのことでした。



ジャパンハウス＝セレモニー



ジャパンハウス＝観光地の展示

1階の展示会場では、日本各地の観光スポットの写真と各観光地の案内チラシが設置され、特に、東京都の紹介コーナーでは、リオ大会に出場する日本代表選手全員の写真を大きくパネル化して展示したり、代表選手のユニホームや選手への応援メッセージが書かれ紹介されており、日本選手の活躍を期待する姿勢が示されていました。また、新国立競技場のジオラマには人々が集まり、さらに、1000体を超えるひな人形の展示や、日本食の寿司や焼き鳥などの提供と日本酒の試飲などの食を含めた日本食文化をアピールするなど、大変盛況であ

ったとのことでした。

2階には、版画、ヨーヨー、書道、浴衣や茶道のワークショップも行われており、外国人の人々は日本文化に興味と関心を持って体験していました。



書道のワークショップ



浴衣の着付けワークショップ



ヨーヨーのワークショップ



版画のワークショップ

ジャパンハウスでは、招待制のレセプションに出席することができました。レセプションは、2020 東京大会の開催に向けて、各国の官民のスポーツ関係者や企業、スポンサーを対象に、次期開催国・都市などをアピールする機会として開催されるもので、700 名以上のゲストが出席しており、バッハ国際オリンピック委員会（JOC）会長はじめ、国内外の多くのオリンピック・パラリンピック関係者が出席していました。日本からも、丸川珠代オリンピック・パラリンピック大臣、鈴木大地スポーツ庁長官、竹田恆和日本オリンピック委員会（JOC）会長、橋本聖子リオ競技大会選手団団長等々、関係者の方々が出席され、

各国のスポーツ関係者と次々にディスカッションされていきました。

このような中で、丸川大臣他、鈴木長官、竹田会長、橋本団長に面会を申し込んだところ、それぞれに面会することが叶い、限られた時間でありましたが、品川区の東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組みや各種機運醸成事業等について説明することができました。また今後、2020 東京大会に向けて、連携事業等、積極的に協力体制を執っていくことを確認しました。



ジャパンハウス＝丸川珠代オリンピック・パラリンピック大臣



ジャパンハウス＝鈴木大地スポーツ庁長官



ジャパンハウス＝橋本聖子リオ競技大会選手団団長



ジャパンハウス＝竹田恆和日本オリンピック委員会（JOC）会長

② ブリティッシュハウス、ブラジルハウス、オセアニアハウスを訪問

ブリティッシュハウスの入場は、セキュリティが厳しく、事前に申請が必要で許可を得たものが入場できる許可制をとっていました。ブリティッシュハウスでは、ロンドンの職員はじめ市の関係者および国際スポーツ関連企業の関係者とのヒアリングと事前キャンプ誘致に関するディスカッションを行いました。特に、ロンドンの職員からは 2012 ロンドン大会の経験を踏まえ、2020 東京大会に向けたアドバイス等についてお話しを伺いました。



**ブリティッシュハウスにてロンドン
市職員にヒアリング**

ブラジルハウスは、コパカバーナ海岸通り沿いの大きな倉庫を改装して設置されており、誰でも自由に入場することが可能で、しかも観光客向けに配慮された内容になっており、ブラジルの文化、自然、ビジネスなどが中心のハウスでした。オリンピック・パラリンピック関係の展示紹介では、車いすバスケットボールの体験会の実施をはじめ各種ワークショップを中心に展開され、非常に人気があるハウスで、入場には長蛇の列ができていました。



ブラジルハウス=ワークショップ



ブラジルハウス=展示ブース

オセアニアハウスは、オセアニア各国のオリンピック委員会の共同により、リオ市の美術大学の一部を借用してハウスが設けられていました。ブラジルハウスと異なり、招待制をとっているため、私たちは事前に申請し許可を得て入場が可能となったところです。そこでは品川区の事前キャンプ誘致PR用冊子を使い、複数の各国スポーツ関係者に対して、品川区を紹介し、説明しましたが、興味を持って聞いていただきました。



オセアニアハウス＝事前キャンプ誘致の説明

③ 〔視察を終えて〕

ホスピタリティハウスは、各国、各地域、各企業などが独自に趣向を凝らし、それぞれの文化、自然、製品、名産など自慢できるものを展示するなど情報発信・PRしており、特に、だれでも自由に入場可能なホスピタリティハウスは、盛況で入場制限をするほどでした。地元のブラジル人の他、外国人の観光客も非常に大勢来場していました。

2020 東京大会に向けては、区内に品川区の自慢を発信する「しながわハウス」を設置し、PRすることにより、訪日外国人や観光客をより多く誘致できると思います。その場合、SNSなどインターネットを活用して、事前に世界に向けて情報発信することにより、訪日外国人や観光客を増加させることにつながります。

また、2020 東京大会の期間中、品川区内に各国、各地域、各企業に対して、区内にホスピタリティハウスの設置を誘致することにより、品川区内に訪日外国人や観光客を呼び込み、増大させることが可能と感じました。しかし、区内にハウスを設置する場所や建物の確保などが困難な本区においては、規模の大小や施設の有効活用など、創意工夫が必要となります。